

## 子どもと保育の情景 (4)

# 「ゆるやかな関係」の中で

戸田雅美

幼稚園の四歳児クラス六月のこと。

たくやは、友達との遊びの中で、自分の思いが通らず、相手に「ばか！」と言いつづけていた。担任が、気持ちが悪く着くように、たくやの話を聞いてみると、そばで見ていたけいが「ばかって言ったら、自分がばかなんだ」と言う。すると、たまたまその場を通りかかったひかるが「ばかって言ったら、自分がばか！」

と大声で言った。

それを聞いた途端たくやは、ひかるのほおを平手で思いきりたたいてしまった。火がついたように大声で泣くひかる。担任は、急いでひかるのほおを冷やしながら、たくやに、「ひかるちゃん、とつても痛そうだよ」などと伝えるが、たくやは、一人で、玄関ホールに行ってしまった。

担任は、たくやのことも気にかかりつつも、今は痛くて泣いているひかるのほおを冷やしなから、成り行きを見ていた子どもたちと共に、その場に残っていた。そばで、けいは、「たくや君、ごめんねしないとね」とひかるの顔を心配そうにのぞき込む。担任も「そうだね。ぶつたりしたらだめだね。痛かったよね……。ひかるちゃん、みんな心配してるよ」とひかるを慰める。すると、ゆうが突然担任の耳元で、「あのね。僕も、ごめんねが言えなかったことがあるんだ……。」と言う。「そうなの……。それでどうしたの？」と担任が聞くと、「あのね、小さい声で言ったの」とゆう。「そう言えたんだ。それでどうだったの？」と担任が聞くと、「許してくれた」とゆう。気がつくとき、そんな会話をしている間に、ほおの痛みが少し和らいだのか、当事者のひかるは、思ったよりけろりとした様子で遊びに戻って行った。

そこで、担任は、ゆうに「きつと、たくや君今頃しょんぼりしてるよね。ねえ、ゆう君、たくや君のところへ先生と一緒に行ってくれる？」と誘う。ゆうは「うん。僕ね、『ごめんね』って小さい声でも大丈夫だよって言ってあげるんだ」と言い、担任とゆうは、たくやのいる玄関に行ってみる。予想通り、たくやは複雑な表情で玄関に立っていた。ゆうは担任に言った通り、一生懸命にたくやに「ごめんね」をしたほうがいいよ……と説得するが、たくやは首を振るばかり。たくやにしたなら、何も知らないひかるに「ばかっと言ったら、自分がばか！」と大声で言われたことは許せないという思いもあったのだろう。

ちょうどそのとき、遊びに戻ったひかるが、魔法使いになったつもりになって、飛ぶまねをしながらやって来た。担任も「ほら、ひかるちゃんもうすっかり元気になったんだね」とたくやに言ってみる。しかし、

たくやは、やっぱり「ごめんね」なんて言う気になれないという様子でいる。担任も、ゆうの気持ちはうれしいが、今日のところはそのままでもいいのかもしれない、と考えていると、突然「ひかるちゃん、ごめんね」という声があった。

ゆうだった。担任もひかるもたくやも、一瞬どうしたのかと驚いたが、次の瞬間、ひかるはけるっとして「いいよ」と元気に返事をした。これを聞いたゆうは「ぼく、たくや君の代わりに言ったんだ」とニコニコする。たくやはというと、心からほっとしたように「ありがとう」と言い、ゆうはますますうれしそうに、たくやと手をつないで歩いて自分たちの部屋に戻って行った。

このエピソードは、私ではなく担任が記録したものである。その記録を元に、園のメンバー全員に私も加

わって何度も話し合い、研究紀要（新宿区立早稲田幼稚園平成17、18年度研究紀要参照）に載せたものである。

この幼稚園は、二年保育で、全員四歳児から入園する。入園してすぐの四月に、ゆうが「ごめんね」が言えなかったことがあると言っていた事件が起こった。このことを、担任は家庭訪問に行ったときに聞いたのだという。

園からの帰り道、道路の脇の少し高くなった所を、ゆうが歩いていると、たまたまひかるがやって来て一緒に歩いていた。そして、同時に二人がそこから飛び降りようとして、二人の体が触れ合ってしまった、ゆう



は大丈夫だったのだが、運悪くひかるが転んでしまった。すると、ひかるがいきなり、「謝って！」と激しく泣いたのだそうだ。もちろん、ゆうが悪いことをしたわけではないし、謝らなくてはならない理由もないわけなのだが、母親は、わざとではないけれどぶつかってしまったのは確かだし、あんなに痛そうに泣いているのだから、「謝ったほうがいい」とゆうに勧めたのだという。

謝ることを「スジ」で考えると、ゆうの「ごめんね」は、四月の事件では少し、そして今回は大きく、ずれている。なぜなら、平手打ちをしたのは、たくさんなのであって、ゆうには全く関係のない話だからである。

しかし「ごめんね」には「悪いことを認める」ということだけではなく、相手のことを思っただけの辛い気持ちを和らげるという意味合いもある。人と人が共に

暮らすとき、その関係は「スジ」だけでは成立しない。ゆうは、自分の以前の経験から、たくやの腑に落ちない気持ちに思いを巡らし、痛くて泣いていたひかるの辛さにも心を寄せ、思わず自分が「ごめんね」と言ってしまったのだろう。実は、ゆうは、一人っ子で、幼稚園での初めての友達との生活に戸惑いの多かった子どもだという。その最初の時期の四月の経験、それもたまたま人も同じ、ひかるが大泣きするという場に出くわして、自分がそのときに感じた思いがこの「スジ」違いな「ごめんね」を言わせたのだろう。

とはいうものの、ゆうの「スジ」違いな、しかし心のこもった「ごめんね」によって、互いに相手の思いに心を寄せ、思いを巡らせるような「ゆるやかな関係」が生まれ、子どもたちの間に広がったことには違いないだろう。

(東京家政大学)